

「学生時代にセーリングを行っていた者のセーリング継続要因」

1914003 今西 龍大 (海洋スポーツ・健康科学研究室)

I. 研究の目的

日本セーリング連盟によると現在セーリングの競技人口は、新規参加者が減少するとともに、学生時代のサークル活動やクラブ活動引退後に続ける人が少ないことが指摘されている。本研究では、学生時代にセーリングを行っていた者を対象に調査を行い、どのような要素がセーリング継続の要因となっているのか明らかにすることを目的とする。

II. 研究の方法

学生時代にセーリングを行っていた者を対象に、基礎項目 8 項目、セーリングとの関わり方 16 項目、徳永らによって作成されたスポーツ行動診断検査(DISC.1)を一部セーリング用に変更した 56 項目について google form を用いた web 調査を実施した。「どのくらいの頻度で実際にセーリングを行いましたか?」という質問に対し、回答した選択肢を 5 群に分け、基礎項目との関係はクロス集計、スポーツ行動診断検査との関係は一元配置分散分析によって分析し(有意水準は 0.05)、分散に有意差が認められた項目については多重比較を行った。

III. 結果と考察

得られた 94 名分のデータを分析したところ、基礎項目については、20~29 歳、セーリングを行うことのできる水域までの移動時間が 30 分未満の者、運動頻度が高い者がセーリングを行う頻度が高く、女性や会社員はセーリングを全く行っていない者が多かった。スポーツ行動診断検査を分散分析した結果、「信念」「重要な他者」「活動環境」「身体的要因」「活動環境」「間接的参与」において有意差が認められた。多重比較では、「信念」については全く行っていない群と週に 1 回以上行っている群、月に 1 回、数回行っている群、「重要な他者」「活動環境」「間接的参与」についてはそれに加え、1 年に 1 回、数年に 1 回行っている群と週に 1 回以上行っている群、月に 1 回、数回行っている群などにも有意差が見られた。これらの結果から、セーリングを行うことで得られる効果に期待していること(信念)、セーリングを行うための施設、人、時間(活動環境)などが揃っていること、セーリングに関連する人(重要な他者)が周りにいること、セーリングに関連する動画、写真、記事をよく見ること(間接的参与)における得点が高い者が、高い頻度でセーリングを実施していたことが示された。

IV. 結論

サークル活動やクラブ活動引退後に、セーリングに関連する人との関わりを構築もしくは維持できること、セーリングを行うために適した環境があること、セーリングに関連する動画や写真などを頻繁に見ることができることが、セーリングを行う頻度に影響していることから、これらの要因に働きかける方策が重要であると考えられた。

主な参考文献

徳永幹雄;スポーツ行動診断検査(DISC.1)の作成,健康科学,Vol6.pp.113-127,1984